



晃洋書房
2,000円

のびやかにかたる

新島襄と明治の書生

伊藤彌彦（大学法学部教授 著）

著者の意図がみごとに成就した一冊を手にした。それはまた著者の人柄がにじみ出たかたちで私たちが良く知っている人物を新鮮な姿で浮かび上がらせる貴重な資料でもある。同志社では新島とその姿が時折あまりにも安易に語られ、「利用」されていまいだらうか。それは、また奇妙な神格化を生み出す土壌にもなる。

伊藤教授は同志社出身者ではない。このことが著者をして新島をのびやかに語ることを助けているようにも思える。等身大、ふだん着、一人間として新島を見る努力をすると、安易に語られ描かれてきた新島像にない魅

力的な、そして優れた人間、教育者、宗教者像が見えてくる。その姿に著者は感動している。

この本は読む者にそのような「像」を自らのうちに描く事を助けてくれるし、著者の感動を共感させてくれる。

事実に基づき歴史を語り、そのなかの人物をいきいきと描くのはけつて簡単なことではない。学識と豊かな感性と想像力がよくマッチしてこそ出来る事である。それがこの著者にはできるものであり、本著の読者にもいきいきとした新島襄に出会う道しるべを提供してくれるのである。第2章「新島襄の洗濯」などはユーモラスな若き新島の姿をみせてくれるのだが、それはまた確実に苦闘を通して大きく成熟してゆく青年の姿でもある。わたしは著者自身が新島と一緒に汚れた船長の下着を洗いながらその姿を描こうとしているように思えてならなかった。

深田未来生（大学神学部教授）

石井十次の研究

同志社大学人文科学研究所編集
田中真人（大学人文科学研究所教授）

杉井六郎（大学名誉教授）

同朋舎 一八、〇〇〇円
ほか執筆
ほか編者

ここに『石井十次の研究』が刊行された。『留岡幸助著作集』『山室重平の研究』に続く研究成果の公刊である。人文研のキリスト教社会問題（C・S）に拠る研究者たちの鋭意集中の業績といえよう。新しい世紀への展望のなかで新島襄の再評価の動きがある。私は新島襄の化育を現代に問う意味、その脈絡についてよい関心があるが、いまや生活の基本コンセプトともなった〈福祉〉をあらためて歴史に問い返す作業が求められている。新島襄の化育と福祉史の系譜、未開拓の分野でもある。C・S研究は留岡・山室の軌跡の探求と解明に続いてこの『石井十次の研究』の結実によって一つの完結をみたといえよう。その意義

はきわめて重い。

石井十次といえは逆境のこともの福祉、岡山孤児院創設（一八八七年九月開設）で知られる。通史としてこの周辺の研究は柴田善守氏をはじめ散乱した先行業績はある。基本資料としての『石井十次日誌』も刊行されている。本書に取載の十二篇の論稿はあたかもモザイク模様のように石井十次の生涯とその事跡の論点を的確に絞りこんで石井の全体像に迫るものとなっている。『日誌』、その石井の全生涯にわたる丹念な記録や関係資料それらを全員が瞬時に効果的に扱えるようにデータベース化する優れた手法が採用されている。べあとがき』の田中真人教授のいう福祉史であり、しかもそれを越えての知見と近代日本とキリスト教のかかわりを独自のキリスト教信仰、福祉―社会問題への「底辺にむかう志」の実践者―石井十次、その思考と事蹟が緻密に解明された好著といえよう。

小倉襄二（新島学園女子短期大学学長）

来日アメリカ宣教師

—アメリカン・ボード宣教師
書簡の研究 1869～1890—

同志社大学人文科学研究所編

宮井 敏 (大学名誉教授)

森永長豊郎 (女子中学校・高等学校教諭)

坂本清音 (女子大学文学部教授)

吉田 亮 (大学文学部助教)

現代史料出版三、八〇〇円
ほか執筆

明治初年以来のアメリカン・ボードの伝道事業の担い手としての宣教師を、異文化接触の最前線で活動する文化的エージェントとして位置づけ、教育、出版、医療、看護、福祉、音楽、体育、芸術といった総合的な見地から解明しようとした、意欲的かつ肉厚な試みの書である。多彩な執筆陣により貴重な初出史料も多く紹介されており、この研究領域に及ぼす影響はきわめて大きいと思われる。

なかでも、本書が婦人宣教師、それも宣教師夫人だけではなく、独身の婦人宣教師の存在と活動に迫り、その大胆な評価に

踏みこんだことに注目したい。

「ウーマンズ・ボードと日本伝道」は、アメリカで誕生した独身婦人宣教師組織の明治前半期における宣教師活動の実態を取り上げている。宣教師ケイデール夫妻を巡る評価は、夫妻の活動の長短を忌憚のない筆致で綴った。同志社女学校初代婦人宣教師A・J・スタークウエザーの苦闘」では、同志社女学校運営をめぐる婦人宣教師と新島襄との「二人のヘッド」の認識の相違が浮き彫りにされ、アメリカン・ボードと初期同志社の相克が説き明かされている。「京都看病婦学校と宣教看護婦リンド・リチャーズ」は、日本の近代看護婦養成史に新しい光を当てた。ほかに、教会音楽、女子高等教育、幼児教育や、アメリカン・ボードと日本ミッシェンの実相など、いずれも斬新な切り口で興味が尽きない。

片野真佐子 (大阪商業大学教授)



筑摩書房
1,800円

僕は考古学に鍛えられた

森 浩一 (大学文学部教授) 著

六十余年考古学とともに歩いてきた人の著作である。行き交う年月、考古学を愛し続けてきた人の「なま」の記録である。人の心をとらえぬはずはない。著者は、学術論文の多さもさることながら、何十冊という本を著した人だからこそ手慣れた筆致で、読者自身の深層を波立たせる示唆を、いともさりりと投げかける。例えば——若いうちに学問の裾野をひろげておかないと中年になっても、学問をのせる土台がちいさいまま——などは老いも若きもドキリとす

るところであろう。したがって本書は、考古学といわず、何かをやりとげようと志す若い人々に、是非読んでもらいたい。

この本を執筆しながら著者の心に浮かび、かつ、消えていったものは何であつたか。著名な過去の学者が、ひとつの成果を得たときに語った「坂路を上ってきた旅人が、峠の茶屋で重荷をおろして一休みする気持」と似通うものがあつたのではないか。

長年の大学勤務を終えた著者は、今後、さらなる峠をめざすのか、それとも峠から見下ろす風景の中にこそ自身をおこうとするのか、本書を読み進むうち、その答えのヒントも語られていることに、読者も気がつくのではなかろうか。

今後の著作に興味のつきぬところである。

浦壁万里子 (大学歴史資料館)

GHQ日本占領史28 財閥解体

細谷正宏 解説・訳
(大学アメリカ研究所教授)



日本図書センター
6,400円

本書は、GHQが編纂した日本占領史シリーズ(全55巻・別巻1)の第28巻「財閥解体」に関連する歴史論文である。財閥解体は労働改革や農地改革と並ぶ重要な経済改革であったが、それは戦後の日本型企業経営を特徴づける出発点にもなった。たとえば、高齢者を対象にした公職追放によって、経営陣の若返りが否応なく行われ、戦前の番頭型経営から近代的・合理的経営への道筋をつけることになった。これは「労使協調路線」とか「株主軽視の経営」という表現で日本型企業経営を描写するとき、その特徴の萌芽がここにあったと指摘できるだろう。

また、日本企業の特徴である長期継続的取引やグループ間の閉鎖性も、GHQによる制限会社の指定および規制の多さに一因を求めることもできよう。奇しくも、八〇年代の日米経済摩擦の論点の一つに閉鎖的な市場アクセスが組上にあげられたが、これも歴史の皮肉かもしれない。

最近、日本では純粋持株会社の設立が認められるようになった。財閥解体の目的が、財閥家族による企業支配の復活や新規参入機会の制限、特権的融資の提供などの弊害を除去することであった。果たして、このような弊害が繰り返されないのか、歴史の教訓から学ぶことは多い。その意味においても、本書は企業組織を研究する者にとっても貴重である。また、同じシリーズの「経済力の集中排除」(第29巻)を併せ読むことによって、GHQによる経済民主化の意図が一層明確になってくるだろう。

西村 理 (大学経済学部教授)



成文堂
3,000円

総合政策科学入門

大谷實・太田進一・真山達志
(大学総合政策科学研究科教授) 編著

今日、政策研究の重要性を疑うものはない。しかし政策の科学には必ずしも確立された研究対象や研究方法があるわけではない。むしろ既存諸学のアドホックな対応に委ねられるところが多いといえる。本書は、こうした現状に対する理論的な再構築ないし体系化を試みたものである。もちろん世にこうした試みは多いのだが、本書を特徴付けているものが少なくとも二つある。一つには、「総合政策科学」という表題それ自体にある。「総合」への強い指向性である。二つには、本学大学院総合政策科学研究科のスタッフによって、

研究と教育の体系化を意識して取りまとめられた点である。

個々の論述には、もちろん経済学、経営学、法律学、工学など既に確立されている諸学問体系に依拠しているところが大きい。一方では、既存の諸学と政策科学を統合するためのある種統合的架橋の努力が重視されている。各章では現実社会の課題解決を意図しながら、そのためのツールやアプローチを検討するのだが、そこに通底するのは、政策問題に取り組むとはまさに人間の基本問題を扱うことだという自覚と、個別の問題や流行に流されない総合政策科学的視座を目指す強靱な意志である。もちろん「総合政策科学研究科」自体が「発展途上」にあり、その学の体系が未完のうちに編まれた本書には、多くの難点もあらうけれども、それに倍する貴重な示唆や貢献があることも確かに思える。

新川達郎 (大学総合政策科学研究科教授)

法哲学叢書 8

弘文堂
3,700円

現代人権論―人権の普遍性と不可譲性

深田三徳（大学法学部教授） 著

本書は、世界各地に無数の人権侵害が存することを認識した上で、「人権の普遍性と不可譲性」を思想的・哲学的手法を用いて基礎づけようとするものである。最近多くの類書を目にするのは意外と少ない。対する本書は、「人権とは何か」「なぜ人権が（地球規模で）尊重されるべきか」という問題を正面から問う力作である。

第一部では、思想史の視座から、人権の観念・思想・制度の歴史が考察される。まずはじめに、中世から十七世紀における「不可譲の権利」の観念・思想の台頭

や展開が整理される。次に、十八世紀以降に「不可譲の権利」思想が制度化され、今世紀に至って「自然権」から「人権」の観念へ移行した点が検討される。さらに、今日の「絶対的権利」の観念の成立なども検討されている。

第二部では、世界人権宣言や国際人権規約などの国際人権法を前提としながら、前述の「人権とは何か」「なぜ人権は尊重されるべきか」といった問題が哲学的に検討されている。著者は、人権原理を基礎づける複数の良き理由を抽出し、それらの相互連関や価値多元論との関係を提示することで、人権の哲学的基礎づけを試みるのである。

本書は、高度に学術的な内容を有すると同時に、人権をめぐる地球規模の実践や活動に関心を抱く者にも、強固な理論的支柱を提供してくれる。人権に関心を持つ全ての人に、一読をおすすめしたい。

演 真一郎（大学法学部助手）

(財)行政管理
研究センター
2,700円

現代の行政改革とエー・ジェンキンソン―英国におけるエー・ジェンキンソンの現状と課題

君村 昌（大学法学部教授） 著

わが国では、独立行政法人（日本版エー・ジェンキンソン）が創られようとしている。地方自治体でも、エー・ジェンキンソンが話題になっている。これらは英国のエー・ジェンキンソンをモデルにしている。しかし、英国における議論や実証データに基づいた緻密な検討は少なく、つまみ食いの概念を導入しているようにも思える。

本書は、英国におけるエー・ジェンキンソンの展開に焦点を合わせた研究である。しかし、単にエー・ジェンキンソンを紹介し分析するのではなく、行政改革や公務員制度改革の文脈の中で捉えよう

としている。英国のエー・ジェンキンソンはサッチャー政権の行政改革との関連で論じられることが多いが、創設は七〇年代に遡る。この動きを正しく理解するためには、さらに一九六八年に出された公務員制度改革に関するフルトン報告以降の議論と改革を検証しなければならない。これが本書の分析枠組みである。

このような分析を通じて、初めて英国のエー・ジェンキンソンの現状や課題が明らかになるのである。本書では、エー・ジェンキンソンを巡って登場する「政策」と「運営」の分離の問題、大臣の「アカウンタビリティ」と「レスポンスビリティ」の問題、公務員制度上の問題などを、詳細かつ論理的に紹介している。

本書の分析は、英国における行政改革の展開を理解する上で、またわが国におけるエー・ジェンキンソン論議を検討する上で、きわめて有益である。

真山達志（大学法学部教授）

犯罪学

瀬川 晃 (大学法学部教授) 著



成文堂
3,500円

著者は、司法試験審査委員と法制審議会少年法部会委員を務められた、刑事学の第一人者である。本書は、生物学や社会学、心理学という広い領域にまたがる犯罪学を単独で叙述されたものであり、極めて貴重な業績である。

本書に於て取り上げられているテーマは多岐にわたるが、その一部を紹介すると、犯罪生物学としては、人類学から始まり、家系、双生児、養子、染色体異常、性ホルモン、栄養、異常脳波、脳障害などの問題が取り上げられている。犯罪心理学からは、フロイトの深層心理や性格、知能、精神障害と犯罪の関係が

論じられる。犯罪社会学の問題では、家庭や学校、職場、人種、社会階層、年齢と犯罪との関連や、都市化と経済情勢、マスメディアの問題が検討されている。さらに、フェミニスト犯罪学やラベリング論、環境犯罪学、犯罪予防、被害者学などにも言及されているし、合理的選択理論や漂流理論、コントロール理論、レフト・リアリスト犯罪学などの諸学説を紹介し、分析・検討されている。

本書は、単なる最新情報の提供にとどまらず、著者の立場からの整理・分析がなされると同時に、犯罪学の現状についての鋭い分析と今後の展望も明示されており、我が国の今後の刑事政策に貢献するところが大きいと思う。

本書の表現は簡潔にして明瞭であるので、犯罪に関心のある門外漢の方にも興味深く読めるものと思われる。

川本哲郎 (京都学園大学教授)

地方都市の比較研究

鱒坂 学 (大学文学部教授) ほか編著



法律文化社
9,500円

「地方の時代」とか「地方の復権」といわれているが、その割には、社会学や経済学における地方都市の研究は進んでいない。特定の地方都市のモノグラフは出ているが、全国の地方都市を問題にする包括的な研究が少ないのである。編者ほか十人の研究者の七年間に及ぶ共同研究の成果である本書は、そうした研究動向の偏りを補うに足る本格的な業績である。

本書の大きな特徴は、地方都市の比較研究を試みている点である。比較研究の対象に選ばれているのは「地方中枢都市」の札幌、仙台、広島、福岡、「地方中核都市」の金沢、岡山、松山、

「地方中小都市」の宇部、因島、高梁、そして形成途上の「新都市」の吉備高原都市の合わせて十一都市である。

比較研究の主要部分は、これら十一都市別にそれぞれの特性を比較した縦割りの分析と、都市イメージ・社会的ネットワーク・環境意識・出生地などの切り口から十一都市を横断的に比較した分析とから成っている。

それらの分析は、都市の歴史や都市システム上の位置を考慮の上、近代化のなかで質的転生を遂げつつある都市社会構造の諸側面の比較を通じて、それぞれの都市がもつ独自性・個性の解明につとめている。

取り上げられている都市が西日本に偏っており、分担執筆にありがちな出来映えのばらつきも散見されるとはいえ、本書はわが国の地方都市研究に新生面を開いた業績として、高く評価されよう。

三沢謙一 (大学文学部教授)



人文書院
7,200円

『新人』『新女界』の研究

二〇世紀初頭キリスト教ジャーナリズム

同志社大学人文科学研究所編

海老名弾正が主宰した二つの雑誌、『新人』（一九〇〇年七月～一九二六年一月。通巻三〇一号）と『新女界』（一九〇九年四月～一九一九年二月。通巻一九号）を六年がかりで精読してきた人文科学研究所の共同研究班の成果が、四六〇頁の本にまとまった。

本書には十六人の執筆者による二十本の論稿が掲載されている。導入として『新人』の意義と性格（田中真人）と『新女界』の始終（宮澤正典）が置かれた後、第一部はテーマ別の論文九本、すなわち宗教思想、ドイツ哲学の影響、宗教美術、時

代思潮、平和論、アメリカ関係、女子教育、「ホーム論」、本郷教会会員論、がとりあげられている。

第二部は人物論となっており、海老名弾正、綱島梁川、吉野作造、谷津直秀、野口精子、海老名みや、安井哲子、実業家信徒たち、一色醒川を組上りにせている。

第一部、第二部の執筆者は竹中正夫、水谷誠、奥村直彦、宮本盛太郎、茂義樹、天木志保美、太田雅夫、関岡一成、小林直正、久威智、坂本清音、佐野安仁、定家修身、笠原芳光の面々で、この研究会が近畿、中国圏を含む学内外の研究者も吸引していたことを示している。人文科学研究所の一連の教会ジャーナリズム研究の流れをくみながら、本書はとくに「一教会の機関紙に留まらず…大正デモクラシー期の社会的リーダー」を扱った点で、今後思想史、教会史、女性史研究に不可欠の基礎資料となるであろう。

伊藤彌彦（大学法学部教授）



創元社
2,500円

リバティ・デザイン

「文化資本」としての「よき趣味」

山田眞實

（大学言語文化教育研究センター教授）著

著者山田眞實さんは、二年前『デザインの国イギリス——「用と美」の「モノ」づくり——ウエッジウッドとモリスの系譜』（創元社）を出版し、今年またリバティのデザインに関するこの興味深い新著を出版した。センスのよい気鋭の学徒である。彼女は、ロンドンのリバティ商会がつくり出したデザインが、なぜ世界中で愛好されていったのか、その秘密をノンフィクション作家のようにさぐり出し、それは、リバティの上品で優雅な「よき趣味」だったのだという。

アーサー・リバティ（一八四

三一―一九一七）はバッキンガムシャに生まれ、若くしてロンドンに出、一代でリージェント街の有名な百貨店を築きあげ、晩年は故郷の発展に尽力し、「サー」の称号を与えられた立派な中の人である。その彼のすぐれた経営戦略やベンチャー精神を評価するとともに、著者はリバティのよき「テイスト」に着目、絶えず一級品の美術工芸品に接して眼を肥やし、日本のデザインも研究、吸収し、感性を磨きながら経営にたずさわっていった姿を浮かび上らせる。

本書をとおり、著者は、現代日本において、「経済資本」や「社会関係資本」や、学歴、資格、文化財のような有形無形の「文化資本」もさることながら、大切なのは「テイスト」や「教養」「感性」「センス」「技」といった「目に見えない「文化資本」ではないか、と鋭く指摘しているようだ。好著と思われる。

児玉実英（女子大学特任教授）



現代思潮社
4,200円

シュトゥックハウゼン 音楽論集

清水 穰 天学言語文化教育研究センター助教授 訳

「六月のある夕刻、田辺キャンパスでひとつのコンサートが開かれた。『現代ドイツの音楽』と題されたその演奏会は、言文センター主催の外国文化週間の一環だったが、：プログラムは野心的、かつ刺激的」（一九九四年『同志社大学広報』No.275）この演奏会を企画・プロデュースしたのが清水穰氏。地球上今やほとんど聴く機会のないシュトゥックハウゼンの『コンタクト』が演奏されただけでも希有なこの催しが、作曲家と清水氏を結ぶ最初の糸となり、やがて氏を作曲家の活動の拠点ケルンへ導くことになる。本訳書は、気難しい作曲家と根気よく対話を交し、彼の

アルヒーフを自由に渉猟できる現場で熟した飛び切りの作物。

戦後現代音楽の旗手シュトゥックハウゼンも昨年めでたく七十歳を迎えた。とはいえ万事にわたる完璧主義が敬遠されて、彼の音楽活動が「過去二十年にわたってパージされてきた」ため、この間伝説上の音楽家と化していた。しかし作曲家は、音楽ジャンル相互の断絶のなかで期せずして分水嶺に立っている。ノイズ、テクノといったポップ・エレクトロニック・ミュージックの分野では、元祖電子音楽の父。他方クラシック音楽の文脈においては、本訳書を読む限り、厳密な数学的知性に裏打ちされた構造的な普遍的全体への志向性において、ヴェーベルンにつながる正統な音楽家。彼の原点であるこの初期の音楽論集が、ジャンルを越えて読まれることが訳者の希望でもある。

馬場孝達江（天学言語文化教育研究センター教授）



洋泉社
2,400円

13歳論

子どもと大人の「境界」はどこにあるのか

村瀬 学 女子大学生活科学部助教授 著

『現代詩手帖』ほかに連載された「十三歳の物語史」を一冊にまとめたのが『十三歳論』である。連載時から折に触れて読んでいたものの、このように一冊にまとめられると、まったく違う迫力を感じる。室生犀星の小説や漫画『ホットロード』を論じた部分で、「母」や「父」を再発見するという下り、あるいは親への反発という表現への読み込み方について、具体的イメー

ジを与えられ鮮烈であった。

「十三歳論」という形をとった

この本の主題は、社会に生きる現代人にとって「自分」という存在の二重性をどう統覚していくのか、その問題提起である。自殺した杉本治くん（十歳）の「詩」や作文の分析から、酒鬼薔薇聖斗の声明文と「懲役十三年」の分析もやはり圧巻で、「十三歳」になったら誰でも「神の声」をきく可能性があり、多分、多くの子が、自分なりの「神」をもち（それは色々なかたちをとってはいるであろうし、その声の大きさや切実さの濃度には個人差はあるであろうが）その声をきいているのではないかと指摘する。そこに「思春期問題」の困難さ、複雑さがあるのではなからうか。

中学三年になる娘との「格闘」の渦中にあり、また「思春期」という主題の奥にあるものをなんとか自分なりにことばにしたいと模索してきたわが身にとって、大きな示唆をいただいた。

佐藤幹夫（養護学校教員）